

中川善史

ふしぎ
けろけろ
短編小説集



目次

鬼の九齋	1
桜の小坊主	2
雨とあずさ弓	4
盗みの一念	5
たんぼぼ山	7
下屋敷の火	9
抜け雀	12
鬼の九齋	14

鬼の九齋

日本橋本石町のあたりに住居を構えた宇山九齋という医者があった。江戸で最も繁華な一帯に住むくらいであるから、たいそう流行った医者で、名医だの神技だのと褒めそやす人も少なくなかった。なにしろ、脈をとるでなく薬を盛るでなく、患者の身体に触れたか触れないかのうちに病を治してしまうのである。息も絶え絶えだった重病人が九齋にかかった途端に、鰻丼を三人前、そう言ってたいらげてしまったとか、飛び起きて日本橋から品川まで駆け出していったとか、逸話に事欠かない。そういう具合であるから、高禄の旗本だの大きな商家だのが小判を山と積んで往診を請うてくる。生活も派手で、吉原の遊郭から患者の元に出掛けたなども、一度や二度ではないらしい。「漢方医も蘭法医もへっぽこばかりだ、本当に病いがわかるのは俺一人だ」などと言い放つものだから、他の医者からは憎まれていた。

九齋には病いが見えるのである。だいたい、手のひらに載るくらいの大きさで、人間の赤ん坊のような姿をしている。ただ、頭に角が一本生えていて、妙にひねこびた目つきをしている。そんな小鬼が患者の頭やら肩やら腹の上に載っている。九齋は、それを摘み上げるだけだ。すると、患者の身体の温みから引き離された小鬼は急に干涸らびて、落雁という菓子のようにもろくなり、たちまちこぼたれ、風の間に消えてしまう。これは、九齋以外のものには出来ない仕業である。九齋でも手に負えないこともある。小鬼ではなく、相撲取りを三人前にしたような大きな鬼が患者の上で胡座をかいて、恐い目で見下ろしてくることがある。これは、もう駄目だ。摘もうとしたら、こっちが食い殺されかねない。九齋は決まり文句を言うだけだ。「残念ですが、手遅れで」すると、その言葉が終わるか終わらぬかのうちに患者はこと切れ、鬼は雲散霧消してしまう。これはこれで、九齋の名声を高めるのに役立ったのである。

ある時、九齋は妙な好奇心を起こして、患者から取り上げた子鬼を自分の懐ろに入れてみた。人間は成功にも倦んでしまうと気まぐれを起こしたくなるのか、それとも小鬼の生態に学者らしい興味を持ったものか。ところが、家に帰ってみると、背中に強烈な悪寒が走った。小鬼が背中を駆け上がったのだ。さらに頭を嚙り始めると、ひどい頭痛と目眩が起こってきた。腹を抓られると下痢を催した。早く小鬼をつまみ出してしまわねばと思ったが、どうにも奴の動きが素早く、また九齋の方が病いのため身体が思うように動かない。下男の権助にやらせようと思ったが、考えてみれば、この小鬼が見えるのは九齋だけなのである。「先生、医者の不養生たあ、このこったね」笑いながら粥を煮てくれる権助には、この忌々しさはわかるまい。そのうちに、病いが重くなってきた。手のひらに載るくらいだった子鬼が人間の子供ほどに大きくなってきたのである。「先生、お医者様、呼ぶだかね」権助がそう言うが、他の医者に病いのことなどわからないのはわかっている。それに、憎まれている九齋のこと、どんな薬を盛られるか、わかったものではない。ついに、鬼は九齋と同じくらいの大きさになってしまった。これでは、ど

ちらがどちらに取り憑いているのか、わからない。これを見た権助が「先生が二人いる」と言って逃げ出した。そういえば、鬼の顔が自分に似てきたような気がする。鬼は、どんどん大きくなり続けた。そのうち屋根を突き破ってしまうのではないかと変なことが心配になりかけた時に気がついた。周りを見回してみると、箱枕も枕元の湯飲みも、いやに大きくなっている。どこかの時点で、鬼が大きくなっているのではなく、九齋が小さくなっていったのだ。鬼は、九齋を掴み上げると手のひらに載せてこちらを見ていた。九齋の顔がこちらを見下ろしているのである。それからまた、襟首を掴み上げて、空中で二三度、揺すぶられた。鬼の身体の温みがにわかに抜けて、自分が干涸らびて、粉っぽくなってくのを九齋は感じた。

その後、九齋は長寿を保ったが、最後はどこかへ姿を消してしまった。生涯独身であったという。あれほどの名声を誇っていたにもかかわらず、ある時期から医業をぶつ切りとやめてしまった。その理由を問われると、「もう、病が可哀相になったから」と、わけのわからないことを言ったので、九齋の発狂を疑う人もいた。

もうひとつ、九齋の挿話といえば、いつの頃からか「二世・九齋」を名乗り始めたことだ。医者九齋といえば、古今、この九齋しかいないのに、何故「二世」なのか、色々な人から問われたが、これには静かに笑うだけで、ついに答えなかったようである。筆者思えらく、おそらく鬼の九齋には干涸らびて消えてしまった本当の九齋への追悼のような気持ちがあったのではなかろうか。鬼がそういうことを考えるものかどうかかわからないが。あるいは、「二世」＝「偽」という洒落だったのかもしれない。だとすれば、なかなか気の利いた鬼だと言わねばならない。

桜の小坊主

その寺には一本の大きな桜の古木があった。どういうものか、余所の桜より早く咲いて遅く散る。ごつごつした岩のような幹から空いっぱい伸びた枝に、驚くほどの花を咲かせるのである。散り始めると、その寺のさして広くない境内は、どこもかしこも風に乗って来た花びらが敷き詰められて、寺全体が桜色に染まったように見える。その花びらを掃除するのは、二人の小坊主の仕事であった。千念と万念である。

年上の千念は十二歳。中どころの武家の出である。しかも、長男であった。本来なら、家を継がなければならない。それが、ある時、夢で菩薩に会って、大部の経典を授かった。それ以来、仏道への憧れが激しく芽生えた。父に叱られようと、母に泣かれようと、両親を説いて説いて、ついに家督は弟に譲るということにして、父が住職と懇意にしていたこの寺へ入ったのである。住職は、その聡いのに驚いた。夢で菩薩から授かった経典というのも嘘ではないらしく、その内容をことごとく語っていた。住職は、いずれは彼を遠国の大きな寺に出して修行させようと言った。

年下の万念は十歳。これも武家の出身であったが、下級の貧しい家の三男であった。家は長兄が継ぐ。二人の兄は秀才であった。それに引き替え、彼は、すべての才を兄達に

吸い取られてしまったかと思われるほど、愚かであった。将来、他家から養子の口がかかるとも思えず、学問や剣の道に生きる術を見出すのも無理、貧しい家の厄介者になるのが確実、ということで、伝手を頼ってこの寺に入ることになった。いわば、体のいい口減らしである。

桜の花弁は、あまりに多いので足下が埋まりそうなほどである。それを千念は、丹念にほうきで掃き清めていく。その横で、万念は掃くというよりほうきを振り回すだけで、花弁が煙のようにあたりを舞い立つ。その万念のほうきに、この寺に住みつく猫がじゃれつく。この猫も愚かであった。万念に髭を切られたり、放り投げられたり、という悪戯をされるのに、万念になつくのである。愚か者は愚か者同士、仲がよくなるのかもしれない。万念が跳ね上げた花弁が降ってくるのを溜息まじりに眺めていた千念であったが、その視線の先で花びらの一枚が、揺れながらだんだん大きくなっていくような気がした。手のひらほどの大きさになり、手拭いほどの大きさになり、さらには人間の子供ほどになり、そして、本当に子供に姿を変えたのである。御伽草子にでも出てきそうな古風な稚児の姿であった。「我は桜なり。今日、童子に姿を変え、汝らに未来のことを告げん」と、その稚児は言った。桜に未来のことがわかるのか、と千念が問うと、「樹木は年を経ると、自ずから過去と未来を見通し、その枯れる時を知る。我、遠からずその時を迎えることを悟りたれば、汝ら、我によく仕えしことをねぎらうて、未来のことを告げん。もし知りたくば」千念は驚いて稚児を見ていたが、かぶりをひとつ振ると、「お教え下さいませ。私が僧として、どのような道を歩んでいくのか」と叫ぶように言った。だが、稚児は千念には答えず、ぼんやりと何が起きているのか呑み込めていない様子の万念に、「汝は、この寺の住職になるであろう」と言った。呆けた薄ら笑いを浮かべて黙っている万念に、さらに「汝、我が枯れし後、また、一本の桜を植えよ」と言った。万念は笑い顔のまま頷いた。わかって頷いているのかどうかは怪しいものだった。「私は・・・私はどうなるのです」千念はさすがのように訊ねた。すると、「汝は、どうなりたい」意外な反問に千念はしばし言葉を失ったが、「私はさる遠国の大きな寺へ参って修行いたします」「それで」「仏法を極め、徳を積みます」「それで」「悩み苦しむ一切衆生を救うことに専心いたします」稚児は、その切れ長の目で冷たく微笑んで千念を見ていたが、「汝は桜になる」とひと言、言った。千念の耳の中で嵐が起こったようだった。桜の花弁の散りようが激しくなった。まるで桜の巨木全体が花弁に姿を変えて崩れ落ちてくるかのように、稚児と千念と万念と猫の上に降り注いでくる。千念は立っていられなくなって、その場に仰向けに倒れてしまった。彼を埋めるように桜が降り積む。しかし、稚児と万念と猫は、堆積した花弁に沈むこともなく、その上で軽やかに跳ねるようにして遊び踊っているようだった。

千念は、その年のうちに遠国へ修行に向かった。来年か再来年と考えていた住職を掻き口説いて、今年のうちに出してもらうことになったのである。その熱心さたるや、この寺に来る前に両親を説得したのと同じ調子であった。その旅立ちは、まるで何かから逃げるかのようなようだった。千念は大寺に入ったものの、いつしか行方が知れなくなった。

桜の古木は枯れた。万念は、住職に頼んで、新たな桜を植えることを許してもらった。どこからか、桜の若木を手に入れてきて、彼自らの手で植えた。何十年かが過ぎ、万念は稚児の予言通り、この寺の住職になった。境内には、大きな桜の木があって、その花弁

を掃除するのは、昔と変わらず小坊主の大仕事だ。

雨とあずさ弓

女が膝の上に載せた弓の弦を弾く。びいいん、びいいん、という音が部屋の中に響く。床の間の前に、女の子が座っている。女の子に向かい合って、この薬種問屋の主人夫婦、番頭を初めとした店の主立ったものが、神妙な顔をして座り、女の子をじっと見つめている。「からびつ」と女の子がぼつりと言った。店の者達は、首をひねったり、顔を見合わせたりしている。「この家に唐櫃はおありか」と弓を弾いていた女が主人に尋ねる。「ごぞいます」「されば、その中をお捜しあれ」番頭が店の者達に目配せをすると、一斉に立ち上がった。しばらくして手代の一人が戻ってきて、番頭に耳打ちする。番頭は、主人の耳にささやく。主人は、しばらく狐に摘まれたような顔をしていたが、女の子と女に向かって辞儀をすると、「今、店の者の申すには、蔵にある唐櫃の中にいた、と言うことです。身体に別状はないそうです」三日前、この家の五歳になる娘が姿を消した。店の者はもちろん、町内、親戚に至るまで手分けをして捜したが見つからなかった。かどわかされたか、天狗に攫われたか、神隠しにあったかとささやかれ始めた頃、店の者が、お咲という十一才の女の子の占い者のことを聞き込んできた。梓弓というと、普通は年取った女が弓を鳴らしながら神を降ろす占いであるが、これはお袋らしい女が弓を鳴らすと、お咲にコノハナサクヤヒメが降りて、告げごとをするというのである。ともかく娘は発見された。なぜ、そんなところにいたのか、娘自身ぼんやりして語らなかつた。やはり、一種の神隠しだろうか、と言われた。

木々の若葉を濡らす雨が降る。九尺二間の裏長屋である。お咲のお袋は、遊びに来た汚い婆アと昼間から酒を呑んでいた。「なに、こんな長屋、すぐに引き払って表店に引っ越すんだ」お袋がいうと婆アは「へへ、それが出来ないのはどうしてかね」お咲の占いは、このごろ、よく流行る。大店の主人や高祿の旗本までが秘かに頼み込んでくる。だが、お袋は金遣いが荒かった。人を集めて酒盛りをしたり、ふらりとどこかに一人で出掛けては酒を呑んだり、役者買いをしたりする。遊びに行った先で騒動を起こしては小判で片を付けて帰ってくる。「走りの鯉なんぞ奢っていた日には、いつまでたっても引っ越しなんぞできねえよ」と、婆アが、するめを食いちぎりながら嘲笑った。年の割に歯が丈夫と見える。お咲は、二人を背に、上がりがまちに腰掛けて、少し開いた腰障子の隙間から雨を見ていた。「おい」と、お袋がいった。お咲は貧乏徳利を抱えると、雨の中、酒を買いに出て行った。

婆アは名前も商売も住まいもわからない。お袋も、婆アとか婆さんとか呼ぶ。時折やってきては凶々しく酒を呑む。お袋も、忌々しそうにしているが断らない。お袋が留守の時でも上がり込んできて、台所の貧乏徳利を勝手に取り上げては呑む。酒を切らしていると、お咲に買いに行かせる。「あの女は、わしにや逆らえないんだ。だから、お前も逆らえないんだ」と言う。「お前の本当のお袋は、あの女に殺されたんだ」と言ったことがある。そうかと思うと、「さっきのは嘘さ。お袋を大事にしてやんな」と言う。

雨にびしょぬれになって、お咲が酒屋から帰ってくると、「遅い」とお袋が言った。婆アは皮肉そうに、「ふん、誰のお陰で昼間から酒を呑んでられるのやら」「お咲のお陰というのかい。なに、あいつは切れ切れの言葉を言うだけさ。それをつなげて占いに拵えるのは、あたしさ。つまりは、あたしがやっているのさ」「いつまで、これが続くんだか」「へっ、あいつが役に立たなくなったら、女郎にでも売り飛ばすさ」「お咲に聞こえるよ」「大丈夫。あいつは、少し足りないんだから」お咲は雨を眺めているうちに、梓弓を聞いているような心持ちになってきた。いつもは梓弓を聞いていると、自然に言葉や光景が頭に浮かんでくる。それを口に出して言うだけだ。「深い森。深い森の中の、あたし・・・」そっと呟いた。

翌朝は晴れた。お咲は一人で芝神明のあたりを歩いていた。お袋達はまだ長屋で寝ているだろう。とある商家の中で慌ただしい気配があった。お咲はその前に立つとかん走った声で「台所の水瓶の中」と叫んだ。「あ、この子は今評判の占い者だ」店の者の一人が言った。この家では、さる大名から拝領した大切な御神酒徳利が失せて、大騒ぎになっていたのである。品は、お咲の言う通りに出てきた。「ありがたや、ありがたや」「神業だ」「神の申し子だ」番頭が、「ありがとうございます。どちらへおいでになるところで？」と聞くと、お咲ははっきりした声で、「お伊勢さま、お伊勢さまの森」と答えた。神童が伊勢参りに出掛けるという噂を聞いて町内やあちこちの町から、自分もあやかりたい、一緒に行かせてくれと言う者がぞろぞろ出てきた。中には、女の子が箱根の山を越えられるのかと心配してついてくるものもある。お咲はその群衆を振り返ると、「ついてくるな！」と、叫んだ。そして、朝の高輪の海の眩しい光を横顔に受けながら、一人、品川の方に歩いていった。

盗みの一念

初夏の両国橋の上である。欄干に凭れて、橋を通り過ぎる人達を眺めながら次郎八は、口の中でもにやもにや言っている。「ほどけろ、ほどけろ、ほどけろ」彼の前を通り過ぎていった若い男の帯の具の口が緩んでいるのを発見したのである。だが、男は尻のあたりに何かを感じたのか、手を後ろに回して搔くと、ついでにきゅっと帯を締め直して行ってしまった。「ちえ」次郎八は舌打ちをすると、こんどは川の方へ身体を向けた。川端の船宿から一艘、漕ぎ出てきたところだ。客を二人乗せている。漕いでいるのは、船頭にしちゃいやに生っちょろい腰の定まっていない若造である。「竿を落とせ」次郎八は念じた。すると、船頭はよろついた拍子に竿から手を離してしまった。竿は横ざまになったまま、川面を流れていく。客と船頭が何か言い合っていたが、やがて、櫓に取りついて漕ぎ始めた。「そこで、三回まわる」次郎八が念ずると、船が大揺れに揺れながら回り始めた。客達はひっくり返りそうになっている。船頭さえ、川へ落ちそうになっている。その騒ぎを見ると、次郎八は満足した顔になり、橋を本所の方へ渡っていった。

「一念を以て事に当たれば、必ず成る。おめえは、その念じかたが足りねえんだ」と、師匠に言われたのである。師匠というのは、一名を「イイズナの為吉」、商売は泥棒である。

この一名には彼の信念が込められている。イイズナというのは、イタチを小さくしたような動物だそうで、イタチなら最後尻を残すだろうが、小さなイイズナは、それさえ残さないだろう。泥棒はイイズナの如く、こればかりの手掛かりも残さずに仕事をしなければいけない、という教訓が含まれているのである。泥棒の心掛けとしては、実に見上げたものだが、為吉には、さらにもうひとつの立派な信条がある。それが、先に挙げた、「一念を以て事に当たれば、必ず成る」である。成らぬのは、信念が足らぬのである。かくのごとく、泥棒の聖人、泥聖と呼ばれてもいような人物であるにもかかわらず、裏長屋に逼塞しているし、同稼業の間でも、あまり尊敬を受けていない。それは、為吉が決して「お城の天守閣から鯨ほこを盗む」というような大きな料簡を起こさないからである。為吉が常に念じているのは、「何文でもいい、小皿でも手拭いでもいいから獲物がありますように」ということである。だから、仕事のたびに何らかの収穫があるが、額は大したことはない。しかし、最近では、「下駄に、鉄瓶に、浴衣に、金が二分一朱」と念じると、ちゃんとその通りの獲物が手にはいる。もはや、盗むと言うより買い物にでも行くような境地に達している。これも一種の名人ではないか。ただし、いつまでたっても高樓玉殿に美女を侍らせるという生活には縁がない。

次郎八は、そういう堅実なイイズナの師匠の弟子であるにも関わらず、ドジでしくじってばかりいた。ある時、とある屋根裏に忍び込んだところ、いやに明るくて騒がしい。気がつくと、それは両国回向院の相撲の土俵の上の屋根で、力士から塩をぶつけられて、ほうほうの体で逃げてきたことがある。また、雪の降る晩に、ある武家屋敷の庭に潜んでいると、突然、山鹿流陣太鼓が鳴り渡り、火事装束の侍達が暴れ込んできて、あたりは斬り合いになった。時代考証も何もあったものじゃない展開に驚いて傍の薪小屋に逃げ込んだところ、引きずり出されて危うく首を刎ねられるところだった。

こういったところが「おめえは、一念が足りねえ」という師匠のお説教に繋がるのである。もうひとつ、「おめえは、力もねえのに大きなことを狙いすぎる。俺みたいに地道にコソ泥に励め」とも言われたが、これは耳を素通りしてしまった。次郎八はコソ泥が嫌いだったのである。というのも、自分の家の戸締まりを忘れて、家財道具一式やられてしまった経験があるからだ。師匠の前では言わないが「世の中でコソ泥くらいイタチの悪いものはねえ」と思っているのである。しかし、念の話の方は、強く心に刻みつけられた。そして、両国橋の上から、念じて船頭の竿を落とさせたり、船をぐるぐる回してやったことで、「なるほど、念じるというのは大切だ」と思い至ったのである。

深夜。ある大きな商家の裏口である。次郎八が念じていた通りの家である。「裏木戸の掛けがねが外れている」と次郎八は念じた。木戸を押してみると、誰が閉め忘れたのか、造作もなく開いた。「勝手口も開いている」なるほど、まるで家が次郎八を招くかが如くに、勝手口から忍び入ることが出来た。「誰も目を覚まさない」ひっそりしている。どこかで、ネズミが鳴いた。「ネズミも黙る」ネズミも鳴き止んだ。ある部屋の上に立ち止まると、「ここが主人の寝間だ」障子を開けると、部屋の調度や、布団を並べて寝ている夫婦者の様子からして、主人と女房だろうと判断された。「枕元に手文庫がある」主人の枕元を探ってみると、箱のようなものが置いてあった。金具の手触りからして手文庫だと思われる。「中に三百両入っている」手文庫に鍵はかかっていなかった。指の先に触れているのが、五十両ずつの包みであろう。取り上げてみると、大きさといい重さといい、確

かに小判のだ。それが、六つ。小判をふところに入ると、難なく表へ出た。誰も追っ
てこないことを念じつつ逃げた。小さな空き地に出た。「ここで立ち止まる」おや、と次
郎八は思った。今、確かにそんな念が胸の中に起こったような気がするが、ここで立ち
止まる必要はないはずである。「小判を取り出す」また、おや、と思った。取り出したく
ないのに、胸の中の声に促されるかのように小判を出した。誰かが傍にいる気配がある。
「小判をそいつに渡す」すぐ自分の胸の前に伸びているらしい誰かの手に小判を載せた。
ちがう、ちがう、そんなこと、俺はやりたくない……。 「ご苦労さん」くぐもった声が、
闇の中で聞こえた。そして、人の気配がだんだん遠ざかっていく。変だ、こんなはずじゃ
ない、と次郎八は焦るが、足が棒杭になったように動かない。

壊れかけたお堂の中に小さな蠟燭が灯っていた。そこにいるのは、イイズナの為吉であっ
た。もう、これきりこの稼業からは足を洗おうと思った彼は、最後に自分の念の力を試
してみたくないのである。彼は弟子に念を掛けた。弟子は、自分の意志で動いている
ように思いこみながら、為吉に操られて見事に大仕事をしおおせた。「確かに三百両」金
を調べ終わると、為吉は蠟燭を吹き消した。俺の念の力も大したものだ。これでやめる
のは惜しいような気がするが、と、立ち上がりかけた時、誰かもう一人、堂の中にいる
のに気づいた。「ご苦労さん」闇の中にくぐもった声が聞こえた。誰かの手が自分の方に
伸びてくるのを感じた。

たんぼぼ山

風に乗って、町中を歩く触れ太鼓の音が眠たげに聞こえてくる。「おい、たんぼぼ山、ま
た膨らんだんじゃねえか?」「ああ、お天道様があったかいからのお」たんぼぼ山と呼ば
れたのは、でかい身体の力士である。いや、力士だった男である。たんぼぼ山の向こう
には、その師匠……。だった、ほわほわ親方が寝そべって空を見上げている。俺達は、相
撲の巡業にやってきた利根川ベリの町の、春の草花に彩られた川を見下ろす土手の上で、
ごろちゃらごろちゃらしているのである。俺は、絵師。浮世絵の絵師だ。絵師がなんで相
撲と一緒に動いているかという、俺がこのほわほわ部屋唯一のタニマチである。もっ
とも、タニマチと言っても金がないので、たんぼぼ山に蕎麦をおごってやったことがあ
るだけだ。まあ、後援者のいないその部屋で、タニマチ面をしつつ、雑用を引き受けつ
つ、そのついでに相撲の風景を絵に描いていた。親方一人、力士一人、タニマチ兼小遣
い兼絵師一人、というわかりやすい部屋だ。

少し前のことだが、俺は絵について思案しながら、江戸の郊外まで出掛けていった。三
年前に草双紙の挿絵で浮世絵師として世に出られた俺だが、その後、役者絵を描いてい
たものの、もうひとつぱっとしない。ああでもない、こうでもない、と悩みながら歩い
ているうちに、とある丘の上の大樹の傍らにある家の前を出た。ふと覗いてみると、
その広い土間には土俵が作られていた。土俵の脇に一段高くなった畳を敷いたところが
あって、そこで親方らしい男が座って居眠りをしていた。土俵では、まわしを締めた巨漢

力士が、今しも四股を踏もうと腰を落としているところだった。気合いが入っているのだから、呑気なんだかわからない雰囲気だったが、俺は、我知らずふところから手帳と矢立を取り出して、その姿を写し始めた。力強い稽古の姿を描こうと思ったのだが、その力士の四股に、筆を持った手は止まり、目玉はまん丸く見開かれてしまった。片足を振り上げた彼は、その振り上げた足の勢いに釣り上げられるかのように、ふんわりと浮かんでしまったのだ。そして、そのまま、振り上げた方向へ一回転、宙返りしてから、ゆっくりと土俵の上に降りてきた。降りてくると、今度は反対側の足を振り上げたが、やはり浮かんでしまい、一回転して降りてきた。これは、四股ではない。「見物の衆かね。まあ、入りなさい」

啞然としている俺に、いつの間に目を覚ましたのか、親方が寄ってきて手帳を覗き込みながら言った。へんてこな四股をどう書こうか苦慮していると、親方は今度は、力士にぶつかってみろ、と言った。普通に力士と組んだら殺されてしまうが、親方が言っているのだから大丈夫だろう、こんな経験も絵師として何かの役に立つかも知れない、と思いきり、両肌脱いで土俵に上がった。どうせぶつかっただけで跳ね返されてしまうだろう、と思いきり体当たりしていくと、ちょっと何かに当たった感じがただけで、俺は前につんのめって転んでしまった。後ろに跳ね返されるならわかるが、前というのは腑に落ちない、と思って見上げると、力士は、風の中の紙風船のように宙をふわふわ舞い浮かんで、ゆっくりと土俵の上に降りてくる場所だった。俺の負けだが、負けた気がしない。その部屋が、つまりは、ほわほわ部屋で、力士がたんぼぼ山だった。それから、俺は、ほわほわ部屋に入り浸りになった。こんな珍しいものを目に出来るのは、滅多にあることではない。なんでも、見てやる精神がなければ、町の絵師はやっていけない。それで、いつの間にか自称タニマチになったわけだ。

なんでも、ほわほわ親方は、ついこの間、最後まで部屋に残っていた力士が辞めてしまい、親方自身も、若い頃に激しい稽古をやりすぎたのか、なんとなく頭がぼんやりしてきたので部屋を閉めようかと思っていたところに訪ねてきたのが、このたんぼぼ山なのだそう。上州あたりの百姓の倅だったが、生まれつきこのふわふわした体質で、でかい割に力がない。その癖、大飯を食らう。空っ風の土地柄、よく風に飛ばされるので、妙義山の天狗や榛名山の龍神とは懇意になったが、生家とはソリが合わず江戸に出てきて、ほわほわ部屋の門を叩いた。「こんなヤツが相撲を取ったら面白かろう。大関になったら面白かろう」近頃とみにぼんやりしてきた頭をぼくぼく叩きながら、親方は入門を許した。利根川べりでの十日にわたる巡業相撲は、五日目まで勝ち続け。しかし、立ち会った勢いでふんわり浮かんでしまい、突っ込んできた相手がそのまま土俵の向こうに落ちるとか、投げられたまま、いつまでも落ちてこず、なんとか引きずり降ろそうと焦った相手が俵から足を出してしまう、とかいう勝ち方ばかりだ。その晩、他の親方連中が、ほわほわ親方のもとに談じ込んできた。「ほわほわの。たんぼぼ山とやらを、辞めさせてもらおうかい」「なんでじゃ」「あんなのが、相撲かい。見物衆は、ふわふわ浮かぶヤツに向かってびよんびよん跳ねている相撲を見に来るとるわけじゃないわい、ほわほわの」「だが、禁じ手は使っておりやせんぞ」「たんぼぼ山がどんな相撲を取ろうと勝手だというのかい。しかし、困ったのは、若い連中が、自分もあんな相撲を取りたいと言って、飯を食わなくなったり、屋根に上がって風を食らう稽古をしたり、四股やら鉄砲やらの稽古

をやろうとせんヤツが出てきたわい。のう、ほわほわの。お主はいいじゃろうが、余所の弟子が弱くなるわい。相撲取りを弱くして、お主も、今まで飯を食わせてくれた土俵に申し訳が立つのかい」

町を回る触れ太鼓の音が、風に乗って聞こえてくる。俺達は、土手の上に寝そべっている。相撲の巡業に来て相撲が取れないのでは、もうこの土地にいる用がない。「先生は、江戸にお戻りになるかの」と、たんぼぼ山が俺に聞いた。俺も一応、タニマチで絵師であれば、先生だ。「戻るしかねえ。たんぼぼ山、おめえはどうする」「俺は、改めて天狗にでも弟子入りするさ。人間界に俺のいるところはねえ」おや、と思った。たんぼぼ山の頭がいやに白っぽく見える。さすがに、力士を見えるのに悩んで白髪が出来たかと思ったが、そうではない。「たんぼぼ山は、たんぼぼ山らしく消えるよ」白く見えたのは、綿毛だった。頭だけでなく眉毛も白くなり、たんぼぼの綿毛らしいのが、ちらちらと風に乗って浮かんだと思うと、たんぼぼ山の大きな体全体が、たくさんの綿毛になってしまって、一瞬吹いた強い風に乗って舞い上がった。青い空一面に、たんぼぼの綿毛が広がった。「短い間だったが、随分と面白いものを見させてもらったよ」俺は、たんぼぼ山に、せめてもの礼を言うつもりで空に向かって言った。もっとも、見たものが全て絵になるとは限らないが。眠っていたと思ったほわほわ親方が、突然大きな声を上げた。「わしは、こんな夢を子供の頃に見たんじゃあ。それをもう一度見たいと、心のどこかで思っていたんじゃなあ」「親方、どんな夢なんで」と聞いてみたが、すでに寝息を立てていた。寝言だったのかも知れない。今、ここが親方の見ていた夢なのか、と、俺は荘子に出て来る胡蝶の夢の話の思い出した。荘子が胡蝶の夢を見ているのか、荘子は胡蝶に夢に見られているのか。俺は、懐から手帳と矢立を取り出すと、親方の顔を写し始めた。自分の夢の中の人物に自分の寝顔を描かれるというのはどんな気分なのかと思うと、笑いがこみ上げてきて、線が震えた。

下屋敷の火

さる大名の江戸下屋敷のこと。夜、見回りをしていた家来が、奥の部屋に続く廊下に火影を見つけた。廊下の右側は壁が続いており、左側は外に面しているがすでに雨戸が立てられている。真っ暗な闇の中に、人の胸ほどの高さに小さな火がちらちら燃えていた。初めは、女中でも手燭を持って立っているのかと思った。だが、声を掛けても返事がない。不審に思って近寄ってみたところ人の気配がない。また、その火というのが、手燭のそれだけでなく、蠟燭のそれでもない。何かが燃えているというのでもない。ただ、きれいな火が闇を浄めるように浮かんでいるのである。

だが、きれいだと喜んでいられるわけにはいかない。火は火である。火事を出したら大事である。早速、人を呼んだ。屋敷にいたものはみな出てきてみたが、火の正体はわからない。ともかく物騒であるから、水をぶっかけて消すことにした。手桶に何杯も水が運ばれ、雨戸も開け放たれた。夜中に何事であろうと、このあたりに住んでいる狸や鼯は

びっくりしたに違いない。ところが、縁側がびしょぬれになるほど水をかけても火は消えない。上から掛けても横から掛けても、下から桶をあてがって火を沈めてみても、消えない。その様子は、却って水の中の花火や、びかびか光る金魚といった風情であったという。結局火を消すことはあきらめて、二名のものが手桶を横に、雨戸を開け放したままに寝ずの番につくことになった。下屋敷の責任者は、あの廊下の火がにわかになさくなる夢にうなされて、ろくに眠れなかった。

翌朝になると、炎は見えなくなっていた。屋敷の中には物知りがいて、空の星も昼間は見えないが、あれはお天道の光が強すぎて見えなくなってしまうのである、廊下の火も星と同様に朝の光の中で見えなくなっているだけかも知れない、と言う。そこで、よく晴れた日にもかかわらず、夜中に開けておいた雨戸を朝になって閉めて廊下を真っ暗にしてみたが、火は姿を見せない。本当に消えてしまったのか。また、別の物知りがいて、あれは星のようなものではなく、むしろ天道のようなもので、朝東からでて夕に西に沈むように、どこかに姿を隠しているだけなのではないか、と言いだした。となれば、屋敷の中のどこかに火は潜んでいることになる。昨晚から神経を消耗している責任者は気が気でない。早速、手分けをして、あらゆる部屋はもちろん、天井裏から床下まで捜してみた。湯殿も厠も入念に調べた。昼間、厠で火が休息しているなどと思いつかべて、笑い出してしまった若い者がいたが、きつく叱られた。池の水も掻い出して調べられた。鯉や亀にとってはいい迷惑であったが、昨晚、水の中でも火が燃えていたことを思えば、道理が通っていることになる。しかし、火はどこにも見出されなかった。日が暮れると、昨日と同じところに現れた。その晩も、二人のものが見張りについた。その内の一人は、宝蔵院流の槍の使い手だとかで、槍を傍らに置いて、目を三角にして火に見入った。槍と火とどういう関係があるのかわからないが、火が無礼を働いたら突き殺そうとも思ったのかもしれない。上屋敷にも報告の者が走った。

殿の住居や政務を執る場所は上屋敷である。この下屋敷はいわば別荘といった格で、殿の休息や、幕府高官や他藩の大名の接待に使われる。従って、普段は管理や警備に当たる者しかいない。

数日して、江戸家老がやって来て、火を検分した。家老はさんざん首をひねったが、ひねったからといって正体が知れるものでもない。結局はひねり損で、決して火事を出してはならぬとだけ言い置いて帰っていった。すでに神経を消耗していた下屋敷の責任者は、家老の厳命にさらに顔を青くした。もし火事を出したりすれば、下手をすれば切腹ものである。お恐れながら上屋敷からも火の番のための人数を、と申し出たところ、二名の若者が派遣されてきた。

上屋敷から来たのは、令野、赤戸という若侍で、三ヶ月ほど前、国許から上役の付き添いということで江戸に出てきたばかりである。江戸に着いてしまえば、時折警護に出るくらいで暇と言えば暇だった。前から江戸に出たら羽を伸ばそうと考えていたらしく、到着早々、さる師匠の元にこっそり通い出して、三味線と唄を習い始めた。

勤務の初日、令野と赤戸は、下屋敷側から見張り役に出ることになった二名と引き合わされてびっくりした。それは前々から下屋敷に勤めていた針素と須田という若侍だったが、実は、四人は既にあの師匠のところで顔を合わせていたのである。針素は三味線を、須田は太鼓を習っていた。こういう柔らかい稽古事に手を出す侍は多くなっていたが、

やはり表向きに出来ることではない。特に例の宝蔵院流の御仁にでも知られたら、槍を持って追いかけて回されるかも知れない。このことは、四人の秘密にしておこうと申し合わせていたのである。四人は、これで思い切り音曲の話に花を咲かせることが出来ると喜んだ。いずれ、手合わせをする機会も出来よう。

昼と夜をそれぞれ前後に分けて二人で組んで交代で番につくことになった。二人の組み合わせは時々代わった。火の現れない昼もやることにしたのは、神経が尖っていた責任者が、四六時中油断することはならぬ、と主張したからである。

見れば見るほど不思議な火であった。彼らも、初めのうちは火を吹き消してみようとか、水をかけてみようとか試みた。しかし、火は、それを柔らかく受け止めて、軽くないすかのようなようだった。気張った務めのはずなのに、見ていると妙に安心してくる。時に、火に見守られ、火に甘えているかのような気持ちさえ抱くことがあった。下屋敷の責任者が神経をすり減らしているのが、滑稽に思えるくらいだった。彼らは火を見て思ったことを話し合った。令野と赤戸は自作の唄を作った。針素は、三味線の新しい手を考えた。しかし、だんだん務めはつらくなってきた。夜こそ、火を見て慰められるのは嬉しかったが、昼、ただただ、なんのためともわからず廊下に座り続けているのはきつかった。午前の番が終わって、午後休息していると、たちまち夕方の番が来てしまう。これでは、あの師匠のところに出掛けるどころか、外出さえろくに出来ない。だんだん、廊下が座敷牢に思えてきた。

この火の一件は人々の好奇心をそそらずにいなかった。まず、殿が見物にやってきた。四人が呼び出され、火の様子について話し、殿のお言葉を賜り、ご酒の下されがあった。それから、奥方ら家族、高禄の旗本、他藩の大名と次から次にやってきて、そのたびに四人は堅苦しい席に召し出された。幕府や各藩のお偉方は火を見に行くのを心待ちにし、ついには、某藩の大名は招待を受けないのを遺恨に思っている等の流言も飛び交い、このことが政治問題に発展しかねなくなってきた。四人は草臥れ果てた。務めの疲れのみならず、四人がお歴々の席に呼ばれるのを嫉妬する輩もいた。男の嫉妬は怖い。一年あまりが過ぎ、相次いで国元に帰るのを許された。帰った四人は城下の川池という場所に住んでいたのも、ようやく音曲の手合わせをすることが出来た。時々、あの火が燃えていたあたりの高さに小さな灯を点して、それを見ながら演奏した。令野は、あの火はなんだったのだろう、と言った。もちろん、他の三人にもわかるはずがない。

後には時の將軍までがお忍びで見に来たという話がある。感嘆久しうして手ずから、忍びゆく恋の通り路 闇ゆえに 消すに消されぬ 火影なりけりと詠んだということになっているが、これは將軍にしては色っぽすぎるので後世の偽作であろう。

下屋敷は、明治になって新政府に召し上げられ、ある高官に下げ渡された。火は、もうその頃には見えないほどに小さくなっていたと言うが、その高官が明日越して来るといふ晩、にわかになんて大きくなって屋敷を焼き尽くしてしまった。

抜け雀

落語の『抜け雀』というのをご存じか。一文無しの絵師が描いた雀が絵から抜け出て空を飛ぶという話じゃ。

この町にも似たような話があるんじゃ。今では、この通り寂れてしまっているが、昔は港を抱えているということで、あたりでは一番の繁華な町じゃった。江戸時代のこと、鳶山雀齋という貧乏な絵師が住んでおった。ご存じかな。なに？ この町に住んでいるのに知らないのか。

この男、腕はいいのだが、偏屈な男で気に入らないとなると、高禄の武士や豪商から頼まれてもハナも引っかけない。その代わり気が向けば、子供の凧の絵でも喜んで描いてくれて、そういう時の雀齋は、実に優しいものだった。千代という幼い娘が一人いた。生まれて一年、経つか経たないかの頃、母親、つまり雀齋の女房が亡くなってのう、男手ひとつで苦労して育てた。と、言いたいところじゃが、本当に苦労したのは千代の方じゃなかったかのう。やせっぽちな娘だったそうじゃ。なんせ雀齋は偏屈もの、自分から頭を下げて歩くような男じゃない。おまけに、筆やら墨やら絵の具やら、これだけは、この土地で手に入る限りのものを欲しがらる。江戸に、和蘭渡りの絵の具があると聞くとそわそわする。

それでも、親子の仲は睦まじいものだったそうじゃ。雀齋の家の壁にいつも飾ってあった絵があつてのう。一見したところ、芋に目鼻でも付けたように見えるのじゃが、これが千代が三歳の時、生まれて初めて描いた絵で、しかも、雀齋の顔を描いたものだそう。数少ない知り合いが来ると、必ずこの絵を見せて「わしは、千代に絵を教えようと思う」と言ったそうじゃ。客の方では、挨拶に困っただろうよ。

千代が六才か七才になったくらいかのう。町に大火事があったんじゃ。雀齋の家のあたりは、被害の一番ひどいところでのう。もちろん、家は丸焼け。雀齋も千代も行方知れず。おそらく、焼け死んだのじゃろうと言われておった。それが、しばらく経ったある夕暮れ、親子連れだつて、その頃の町名主・鷹野屋鶉兵衛の家の裏口に立ったというのじゃ。実は、この鷹野屋、秘かなる雀齋の支援者じゃ。いや、名主という役目上、雀齋を快く思わないお偉方との付き合いも多いので、あまり表沙汰には出来ない。遠慮に遠慮を重ねての支援なんじゃが、おそらく今に残っている雀齋の絵の多くは、この人の手を経たものじゃろう。迎えた鶉兵衛は、なんだか雀齋も間が抜けてしまった、という感じがしたそう。時には狷介孤高というほどだった彼が、乞食坊主の背負う頭陀袋のように見えたという。飯を食わせ、ある一部屋に寝かせた。その晩くらいは、雀齋とゆっくりと酒など呑んで語り合いたいと思ったが、何日もどこかを彷徨っていた千代の疲れを思って休ませたのじゃ。

夜、鶉兵衛は、ふと目覚めた。大火事以来、こういうことはよくある。今だ、気が立っているのだろう。夜中に起きた時は、一応、手燭を持って屋敷内を一通り見回ってから寝

るといふことにしていた。すると、一部屋だけ、灯りがともっているところがある。普段から、燈油を無駄遣いしないように家中に言いつけてあるのに、と、近づいてみると、例の雀齋親子を泊ませた部屋である。ようやく屋根の下に落ち着くことの出来た親子にしてみれば、いろいろ語ることもあるであろう、だが、この深夜に灯りをつけていることは、他の奉公人の手前も、一言言わないわけにもいかない。その部屋の前に立ち、わずかに障子を開けてみる・・・すると、部屋の隅にあった文机に向かっている千代の背中が見える。なにやら、一心にもものを描いているようである。絵の稽古であろうか。だが、それなら昼間にやればいいものを。やはり、ひと言注意すべきであると思い、障子をさらに広げてみると、その部屋の押入の襖いっぱい、大きく人の姿が落書きがしてあるのが目に入った。「これは、なんと」声を抑えようとしながらも、怒気を含んだ溜息のようなものが出た。千代が振り返った。顔がひきつっていた。「千代や。お前、なんてことをするんだい。私は、雀齋さん大事と思えばこそ、かくまうことにしたんだ。それをなんだい。人の家の襖に、こんな落書きをすることは、言いたくはないが、恩を仇で返すような悪戯だよ」千代は、もう、気が動転して、ごめんなさい、ちがうんです、と繰り返すばかりで、さっぱり要領を得ない。もちろん、幼い娘のことであるから、そんなに道理の立った説明が出来ようとも思えない。「ともかく、今晚は、もう寝なさい。このことは、明日もう一度話を聞きましょう」そう言って、鶉兵衛は自室に戻り、横になった。あの娘をどうすべきか、あれこれ考えて決まらなかったが、そういえば、雀齋の姿が見えなかったことに気が付いたことは、だいぶ時が過ぎてからだった。

翌朝、鶉兵衛の部屋に呼ばれた千代は脅えきって、ひたすら畳に頭をすりつけている。許してもらえらるなら、百回でも二百回でもこすりつける気と見える。一緒に来た雀齋は、尋常に座っている。朝の空気を楽しんでいるが如くに、ふわふわと微笑んでいる。そのあまりの対照に鶉兵衛は変な気がした。こうなると、反省しきりらしい千代よりも、まず雀齋を問いたださずにはいられない。「雀齋さん、娘の絵の稽古は結構だが、やっていいことと、悪いことはあるだろう」すると、雀齋は、なんだか間の抜けた微笑みを浮かべて、「ほう、なんのことじゃろう」その顔を見て鶉兵衛は急に雀齋が憎くなった。いったい、今まで、曲がりなりにも、この町で絵師として飢えなかったのは誰のお陰か。「しらばっくれるのかい。いいさ、こっちへおいで。お前さん方が泊まっていた部屋だ。ほんの悪戯かもしれないが、雨露をしのげるようにしてあげた私に、こんな馬鹿にした話はないだろう」二人を連れて、例の部屋を開けると「おや」昨晚、たしかにあった襖の落書きはなかった。「あれは、夢だったのだろうか」と震えた声で言う鶉兵衛に、雀齋が「夢じゃないよ」鶉兵衛はびっくりした。なんで、雀齋が自分の夢のことを云々するのだろうか。よくわからなくなっていると、雀齋が、その心を見澄ましたように、「あれは、わしだ」つまりこういうことじゃ。大火事の夜、いったん逃げ出した千代だったが、なにを思ったか、また火の中に入って行って例の三歳の時に初めて描いた父親の絵を持ち出そうとしたんじゃ。雀齋が助けに飛び込んだが、却って煙に巻かれて死んでしまった。千代は不思議に助けられた。誰が助けたか。あの千代が手にしていた紙の中から絵の雀齋が抜け出て助けたのじゃ。芋に目鼻の雀齋がよ。鶉兵衛の世話になることが出来た雀齋は、ほっとして襖の中で絵に戻って休んでいたというわけだ。

その後、鶉兵衛は襖を絵の雀齋の居所として提供し、千代の養育も引き受け、この辺り

では珍しい女流の絵師に育て上げたというな。ほれ、ここにあるのが、千代の絵じゃ。『父娘図』という、おそらく雀齋と幼い頃の自分を題材にしたものだろうな。なに？ 本物か？ もちろん、本物じゃ。なんじゃ疑うのか・・・なに？ そもそも、絵から人が抜け出るなんて話からして怪しい？ 失敬な。そんなことをいう輩に見せたくはないわ。帰れ帰れ。

全く近頃の若い者は・・・のう、千代や。怪しからん奴らは帰りおったわ。わししかおらん。お前も出てくるかい。

鬼の九齋

日本橋本石町のあたりに住居を構えた宇山九齋という医者があった。江戸で最も繁華な一帯に住むくらいであるから、たいそう流行った医者で、名医だの神技だのと褒めそやす人も少なくなかった。なにしろ、脈をとるでなく薬を盛るでなく、患者の身体に触れたか触れないかのうちに病を治してしまうのである。息も絶え絶えだった重病人が九齋にかかった途端に、鰻丼を三人前、そう言ってたいらげてしまったとか、飛び起きて日本橋から品川まで駆け出していったとか、逸話に事欠かない。そういう具合であるから、高禄の旗本だの大きな商家だのが小判を山と積んで往診を請うてくる。生活も派手で、吉原の遊郭から患者の元に出掛けたなども、一度や二度ではないらしい。「漢方医も蘭法医もへっぽこばかりだ、本当に病いがわかるのは俺一人だ」などと言い放つものだから、他の医者からは憎まれていた。

九齋には病いが見えるのである。だいたい、手のひらに載るくらいの大ききで、人間の赤ん坊のような姿をしている。ただ、頭に角が一本生えていて、妙にひねこびた目つきをしている。そんな小鬼が患者の頭やら肩やら腹の上に載っている。九齋は、それを摘み上げるだけだ。すると、患者の身体の温みから引き離された小鬼は急に干涸らびて、落雁という菓子のようにもろくなり、たちまちこぼたれ、風の中に消えてしまう。これは、九齋以外のものには出来ない仕業である。九齋でも手に負えないこともある。小鬼ではなく、相撲取りを三人前にしたような大きな鬼が患者の上で胡座をかいて、恐い目で見下ろしてくることがある。これは、もう駄目だ。摘もうとしたら、こっちが食い殺されかねない。九齋は決まり文句を言うだけだ。「残念ですが、手遅れで」すると、その言葉が終わるか終わらぬかのうちに患者はこと切れ、鬼は雲散霧消してしまう。これはこれで、九齋の名声を高めるのに役立ったのである。ある時、九齋は妙な好奇心を起こして、患者から取り上げた子鬼を自分の懐ろに入れてみた。人間は成功にも倦んでしまうと気まぐれを起こしたくなるのか、それとも小鬼の生態に学者らしい興味を持ったものか。ところが、家に帰ってみると、背中に強烈な悪寒が走った。小鬼が背中を駆け上がったのだ。さらに頭を嚙り始めると、ひどい頭痛と目眩が起こってきた。腹を抓られると下痢を催した。早く小鬼をつまみ出してしまわねばと思ったが、どうにも奴の動きが素早く、また九齋の方が病いのため身体が思うように動かない。下男の

権助にやらせようと思ったが、考えてみれば、この小鬼が見えるのは九齋だけなのである。「先生、医者の不養生たあ、このこったね」 笑いながら粥を煮てくれる権助には、この忌々しさはわかるまい。 そのうちに、病いが重くなってきた。手のひらに載るくらいだった子鬼が人間の子供ほどに大きくなってきたのである。「先生、お医者様、呼ぶだけかね」 権助がそう言うが、他の医者に病いのことなどわからないのはわかっている。それに、憎まれている九齋のこと、どんな薬を盛られるか、わかったものではない。 ついに、鬼は九齋と同じくらいの大きさになってしまった。これでは、どちらがどちらに取り憑いているのか、わからない。 これを見た権助が「先生が二人いる」と言って逃げ出した。そういえば、鬼の顔が自分に似てきたような気がする。 鬼は、どんどん大きくなり続けた。そのうち屋根を突き破ってしまうのではないかと変なことが心配になりかけた時に気がついた。周りを見回してみると、箱枕も枕元の湯飲みも、いやに大きくなっている。どこかの時点で、鬼が大きくなっているのではなく、九齋が小さくなっていったのだ。 鬼は、九齋を摘み上げると手のひらに載せてこちらを見ていた。九齋の顔がこちらを見下ろしているのである。 それからまた、襟首を摘み上げて、空中で二三度、揺すぶられた。鬼の身体の温みがにわかには抜けて、自分が干涸らびて、粉っぽくなってくのを九齋は感じた。

その後、九齋は長寿を保ったが、最後はどこかへ姿を消してしまった。 生涯独身であったという。 あれほどの名声を誇っていたにもかかわらず、ある時期から医業をぷつぷつとやめてしまった。その理由を問われると、「もう、病が可哀相になったから」と、わけのわからないことを言ったので、九齋の発狂を疑う人もいた。

もうひとつ、九齋の挿話といえば、いつの頃からか「二世・九齋」を名乗り始めたことだ。 医者九齋といえば、古今、この九齋しかいないのに、何故「二世」なのか、色々な人から問われたが、これには静かに笑うだけで、ついに答えなかったようである。 筆者思えらく、おそらく鬼の九齋には干涸らびて消えてしまった本当の九齋への追悼のような気持ちがあったのではなかろうか。 鬼がそういうことを考えるものかどうかかわからないが。 あるいは、「二世」＝「偽」という洒落だったのかもしれない。 だとすれば、なかなか気の利いた鬼だと言わねばならない。

ふしぎけろけろ短編小説集

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
